

静かな夜、窓にお月様はきれいな鏡餅に見えるのだった。これも飢餓線上だから知る実感だろう。四十四年経過した今、収容生活を思い出して、なにごとか悪夢がよみがえる。シベリアの空気は凍ってキラキラ輝いていた。あれは何だったか、今まで知らなかった。テレビで細氷現象を知った。

抑留二回目のお正月が来た。ぜんざいを戴いた夢を見た。もう一杯食べたかった。明けてもただ思う事、腹一杯食べたい、帰り度の思う事ただ一つ、ソ連に連れられて兵隊は笑顔を見る事はなく、本質的には空腹と、切実な未来に不安感と云う圧力が、重くのしかかっていたのだ。

ソ連に来て暖かく成ると、野草を摘んで、やたらと湯がいて食べ、毒草の混入で命を亡くした者も多く見られた。特にアメリカ赤痢が大流行し、わたしもその一人だった。

アルマータ地で夏に女は裸足が見られ、きれいな娘さんが道を歩き乍ら、手鼻を飛ばす姿も珍しくなく、又我々日本のソルダート、腰に缶詰缶をぶらさげているの

が珍しげに眺めていた。

私たちの大隊長以下は、軍隊ありしところと同様にいつでも階級を続行、一般下士官兵隊より食事の量は少しは多かった。集団生活をやっている中で、こういう規律が私には納得できなかったのである。

二十二年の夏が来ようとしている。私は健康診断の結果（お尻の肉）二級でダモイが言われた。自分の中隊から百人、各収容所混成でダモイ列車で二十五日間、ナホトカに向かった。ナホトカ浜で一週間の訓練にて、引揚船恵山丸、舞鶴入港、日本看護婦、日本婦人会の皆様の出迎えてこのときのうれしさは今もなお脳裏にやきついている。

同胞の骨拾わねば

高知県 東山 林

ソ連抑留の体験を書いた書物は、個人的なものから団体等で発刊したものが数多くあるし、その内容も、極限

の中で心身ともに苦しかった様子を赤裸々に述べたものも多く、我々の心を打つが、この苦しみを体験としたことのない人々には、その状態はピンとこないかも知れない。

今回、平和祈念事業特別基金が、遺しやの念を示す事業の一環としてまとめようとしている抑留実態の手記については、私が体験したことも、他の多くの皆さんが体験したことと大同小異、五十歩百歩のことと考えるし、ことに最近急速に痴呆性老人病のきざしが見え始めた現在、四十数年昔のことを思い出して正確に書くことなどは、なかなか難しいと思うので、記憶による記述は、正確に覚えていられる人々におまかせして、私は、当時の記録に基づいて、その真実のみを書き残したいと思う。

すなわち、昭和二十年十二月から翌二十一年四月までのわずか五か月間に、私の所属していた部隊百二十人足らずの隊員の中で、これだけの戦友が犠牲となったことは、抑留中の強制労働と、そして給食の状態等がおよそどのようなものであったのかを、他の人々が記したことがらと併せて想像してほしい。

これだけは決して間違っていないから……。

記

- | | | | | | | |
|-------|----------------|------|---------|-------|------|---------|
| 阿武 | 康吉 (大14・9・8) | 山口県 | 20・12・9 | 12:00 | 栄失 | 山現上 |
| 高橋 | 庄司 (大11・10・28) | 山梨県 | 21・1・7 | 23:00 | 栄失 | 野現上 |
| 松谷 | 良夫 (大14・12・23) | 島根県 | 21・1・8 | 23:00 | 栄失 | 山現上 |
| 今井 | 年一 (大14・11・15) | 神奈川県 | 21・1・15 | 08:30 | 栄失 | 歩現上 |
| 運藤 | 幸雄 (大13・1・2) | 秋田県 | 21・1・27 | 16:00 | 栄失 | 山現上 |
| 古西 | 惇一 (大14・7・22) | 宮崎県 | 21・1・29 | 06:00 | グループ | 性肺炎 山現上 |
| 金繩 | 熊七 (明45・2・26) | 福岡県 | 21・2・5 | 24:00 | 栄失 | 山予上 |
| 中村直太郎 | (明45・6・24) | 山口県 | 21・2・5 | 24:00 | 栄失 | 輜予上 |
| 大友 | 泰治 | 宮城県 | 21・2・5 | 24:00 | 栄失 | 輜予上 |

21・2・9 18:00 栄失 山現上
大久保松次(明41・4・21) 鹿児島県

21・2・20 11:00 栄失 步予上
曾根 義治(大14・4・21) 埼玉県

21・2・23 23:00 栄失 山現上
鈴木 清文(大12・1・23) 愛知県

21・2・23 24:00 栄失 轡予上
松本 變雄(大13・3・25) 熊本県

21・2・24 11:05 栄失 野現上
鈴木 庫雄(大13・4・1) 茨城県

21・2・27 09:05 栄失 衛現上
安部 力(大14・1・11) 神奈川県

21・2・27 13:30 栄失 步予上
白倉 卯八 埼玉県

21・2・27 15:30 栄失 步予上
吉川 一夫(大14・10・1) 福岡県

21・2・28 15:15 栄失 步現上
見形 廣儀(大15・4・1) 栃木県

21・3・4 07:00 栄失 步現上

西 徹(大6・9・18) 福岡県

21・3・4 10:00 栄失 山現上
片山 良雄(明41・10・17) 岡山県

21・3・7 04:00 栄失 步補上
山口作之助(明40・6・9) 茨城県

21・3・7 05:50 栄失 市民
中村 善一(大3・8・1) 静岡県

21・3・7 06:00 栄失 步補上
布施 重一(大11・11・10) 東京都

21・3・8 15:20 栄失 步現上
白石 清(大5・6・15) 宮城県

21・3・9 04:10 栄失 山現上
西島 忠次(大3・12・28) 埼玉県

21・3・9 05:00 流感 上
水谷 淳(大10・2・20) 埼玉県

21・3・9 05:50 気管支炎 步現上
竹内 武雄(明42・7・16) 島根県

21・3・9 13:30 栄失 衛補上
榎本 重雄 岐阜県

白浜	芳一	21・3・12	08：05	栄失	頼現上	
				北海道		
兼安	義治（大13・9・10）	山口県	21・3・13	13：50	栄失	航現上
田川	正美（大13・12・18）	愛媛県	21・3・15	17：00	栄失	歩現上
宇高	知（大9・12・18）	愛媛県	21・3・16	00：15	栄失	砲現上
木村	勇（大8・1・15）	鹿児島市	21・3・26	07：05	栄失	山現伍
向迫	秋雄	広島県	21・3・26	11：00	栄失	山現兵
宗藤	貢（大9・2・5）	広島県	21・4・1	08：30	栄失	衛上
大沼	勇作（大4・2・14）	山形県	21・4・22	03：30	栄失	警察官
岩本	静雄（大14・8・29）	鹿児島市	21・4・23	08：00	栄失	歩補兵
			23：30	癩痢	山現上	

合掌

以上三十七人

ハラゴン抑留当時の食物の量は、主食の黒パンが桃印樽寸小箱程度の大きさのものが一個に、スープは飯盒のふたに八分目、これが一食分であった。パンを配分するときは、パンの側（耳）の方は堅くて重く、中の方はやわらかくて軽いから、自前の天秤計りをつくり、両方に乘せて水平になるようにし、隊員総監視の中で行われた。スープには器の底に大豆やグリーンピースが沈んでいるから、金網を使って別の容器に移し、金網の上に乗っているものを五個、六個と数えながら平等に分配した後、汁を分けた。将校、下士官、兵を問わず人間の動物的本性をむきだしにしたのがこのときである。

クタクタに疲れて伐採作業から帰り、穴ぐらの中で夕食をしながら、故郷の話をしていた隣りの戦友が、うつむいて何も言わなくなったので「おい、どうした」とひじで軽くついたら、ゴロンと倒れて死んでいったことや、「今生の思い出に腹いっぱい食わせてほしい」と申し出た兵に、私は自分のものと比較的元気な人のもを

集めて与えたら「うまいうまい」と言って食ったのはよかったが、翌朝は冷たくなっていた。

全隊員が赤痢にかかり、一晚に二十回も三十回も便所へ行くので、穴ぐらまで帰りつく暇もなく、毛布に身を包んで、零下三十度を超す便所の横で寝たりうづくまつたりしていた姿が浮んでくる。私も教え切れないほど便所へ行きながら、立場上、隊員のめんどろをみなければならなかったこと等々。

地獄を見たことがないから確たることは言えないけれども、もし地獄があるとすれば、このような状態のことを指しているのではあるまいかと今つくづく思い出している。

それに、もう一つ頭にこびりついて忘れられないのが「遺体」の処理である。

初めの間は枯れ木を集めて碁盤形に一メートルぐらいの高さに積み重ね、全裸にした遺体をその上に置いて、茶毘に付していたが、三月に入り「焼くことは相ならぬ」とソ連側の命令があり、凍土はどうしても満足に掘ることができず、雪を覆って葬ったのはよいが、次の日

に別の死亡者を埋葬するため墓地に行ってみると、一面に荒されていて、遺体は跡かたもなくなっていることもあった。それが餓狼のしわざであることを知って茫然、暗涙にむせんだことも再度ではなかった。

こうして犠牲となった方々の遺体の処理をしてきた私は、どうしても御遺族の方々にこの実情をお伝えする責任があるように思い、知る限りのことを記録しておいたのが前記三十七人の人々である。

権力を失った軍隊、いや、烏合の集と化した元軍隊の将校、下士官、兵といった人間関係の醜さはもう思い出したくない。

ハラゴンからキルガへ移動したのが昭和二十一年の六月、平素から尊敬し信頼していた中隊長が逃亡した隊員の心境は、人事面を担当していた私の立場から考察すると、他の中隊の人々とはちょっと異なるところがあるように思えた。それは、将校の言うことなど真面目に聞くとする者は少なく、何事によらず私に相談を持ちかけたことなど、兵の気持ちが変わるような気がした。キルガに移動してからは、大隊副官をしていた静岡県

人で、勝又梅吉という大尉が我々のことについて指図していたことは覚えていますが、それが中隊長という立場であつたかどうかについて、私の記憶は定かでない。

こうした状況の中で、八月まで伐採作業や材木の引き出し、また貨車積み等の作業をしながら約二か月、この間に特殊技術者（自動車運転手、機械組立工、洋服仕立職、散髪職、大工、左官、等々）が分遣、派遣等の名目でどこかへ転出するという形をとり、大編成替えが行われた。そして部隊の主力はコムソモリスクへ移動したけれども、私はキルガに残留し、他部隊残留者と合流して昭和二十三年十一月まで一年と数か月をこの地で過ごすこととなる。

“立つ鳥後を濁さず”ということわざがあるが、移動した後の收容所内はまことに乱雑で、遺骨を放置したままには驚くとともに、悲しく胸が痛んだ。そして俘虜の七つ道具も至るところに散乱していて、整理するのに苦労した。

しかし一人だけで残留し、他部隊と合流したので、精神的には楽になり「やれやれ」という気持ちになつたこ

とを思い出しているが、そのときは人間の持つ非情さを思いつつ、遺骨箱に記してあつたものと一緒に写し取つた未知の同胞たち、願わくば靈よ安かれと念じつつ。

記

中村 止 福岡県

20・12・1 03:26 気管支肺炎 伍

小田 義男（大14・3・15）宮崎県

20・12・23 07:10 左急性化膿性中耳炎 見士

加藤丑太郎（大4・1・31）長野県

21・1・1 13:25 腸閉塞 上

西村伊三郎 滋賀県

21・1・25 17:06 栄失 兵

村上 利夫 福島県

21・1・30 07:20 急性大腸炎 上

高野 止一 北海道

21・1・30 13:00 肺炎及尿用症 軍

広田大市郎（明40・1・11）京都府

21・2・1 19:50 腹部打撲腸管破裂 兵

後町直古止（大11・10・22）長野県

岩本	21・2・16	11:40	栄失	兵	平野	正(大12・8・27)	和歌山県	上
岩本	昇三(大6・3・18)	東京都			小林	守(大10・8・21)	新潟県	上
中山	敬之助	長野県			岩佐	健二(明42・5・27)	大阪府	
山本	唯夫(大3)	青森県			黒坂	徳太郎	岩手県	
吉田	藤吉(大2・4・12)	山形県			岩谷	縁郎(大12・5・31)	兵庫県	一
林	穆(大15・7・4)	長野県			木村	浅一(大12・1・15)	長野県	上
河野	秋夫(大11・10・22)	山口県			岩本	長熊(明41・2・9)	山口県	
奥野	義雄(明41・10・10)	大阪府			長尾	直太郎(大9・2・18)	岩手県	軍
菅沼	義雄	埼玉県			鬼丸	昌市(明41・2・26)	三重県	上
小堀	捨次郎(明43・3・7)	福井県			村石	丹次(明41・6・11)	東京都	

田中貞次郎 21・2・26 09:30 栄失 上
 群馬県
 吉田 寛一(明40・5・25) 21・2・26 14:30 栄失骨折 上
 和歌山県
 小畑嘉一郎(明41・4・18) 21・2・27 13:30 栄失 衛上
 大阪府
 木村国太郎(大4・3・1) 21・2・27 13:50 栄失 兵
 香川県
 岡本 行三(大2・3・19) 21・2・28 15:30 栄失 上
 青森県
 舟山 昇(大14・3・21) 21・3・1 08:30 流感 上
 和歌山県
 穴口米太郎(明42・11・13) 21・3・1 14:21 栄失 衛上
 大阪府
 母井 惟一(明43・10・13) 21・3・1 14:50 急性肺炎 衛軍
 徳島県
 藤原 信一(明45・4・26) 21・3・2 00:20 栄失 兵
 広島県

木村 安治(大4・3・15) 21・3・3 14:30 流感 上
 青森県
 北田松太郎(大13・3・15) 21・3・3 22:20 栄失 上
 岩手県
 出口 勇(明45・7・25) 21・3・3 23:10 栄失 兵
 神奈川县
 山本 有幸(大7・9・18) 21・3・3 23:15 栄失 工伍
 大阪府
 相沢 清蔵(大13・7・10) 21・3・4 08:50 栄失 上
 福島県
 池浦 武雄(明44・9・1) 21・3・4 19:55 栄失凍傷 上
 和歌山県
 荒金 忠治(明40・9・11) 21・3・4 22:30 栄失 上
 大分県
 浜田 忠雄 21・3・4 22:30 栄失 上
 高知県
 〔以上四十四人 放置した名簿より〕
 三宅 和郎 21・2・1
 岡山県
 富田 幸 21・2・1
 北海道

	21・2・1 (ピラ)								
池地喜久雄		北海道		上					
	21・2・3 (ピラ)			一					
永安 光夫		長崎県							
	21・2・4 (ピロビジャン病院)			上					
伊藤 武		北海道							
	21・10・10 05:30 (バブストア)			上					
三宅勇太郎		香川県							
	21・12・21 (ピラ)			一					
佐々木善男		北海道							
	22・12・23 (キルガ)								
安部 保枝		東京都							
佐藤 隆正		東京都							
伊尾 政男		福井県							
桜井 正夫									
大原 盛信		愛媛県							
	[以上十二人 遺骨箱により]								
峰田 十七		山形県							
往田 栄二		石川県							

〔以上二人は、確実な人よりキルガ病院において死亡したことを確認して記録した〕

合掌

シベリアでの思い出

千葉県 久保田 精 一

四十数年前のシベリアを思い出せと言われても忘れたことも多い。今考えると終戦でよかったと思う。負けて終わったことは、悔しく残念であった。今ここに形容の言葉がない。

私は満州現地召集、半月で終戦、武装解除抑留ということになった。本来なら戦争が終結した場合は復員に導くことが道義であるが、ソ連は日本軍を抑留、いや一般日本民をも抑留した。日本軍の倉庫に満積されていた食糧、被服類等を日本軍の手により鉄道輸送でソ連へ搬入し、続いて日本兵を国内へ輸送したのである。臨月を迎えている妻を異国（今自分がいる所から何キロでもな